

2011年の私たちを振り返る



【「仮設」が「日常」となったその後は…】

1月14日と15日、すたんどばいみーによるモビリアこども支援が行われました。前回は12月の初旬でしたので、ほぼ一カ月ぶりでの子どもたちとの再会です。いつものようにすたんどばいみーのメンバーは、朝から子どもたちの住む仮設住宅を回り、子どもたちを呼びに行って、いつもとほぼ変わらない顔ぶれがそろいました。まだできて間もない仮設の集会所での学習と遊びの時間は、楽しく過ぎて行きました。

今回の活動の中では、すたんどばいみーは一つの目的を持って来ていました。すたんどばいみーは、3月に中学生を神奈川県に招待し、ホームステイや、普段のすたんどばいみーの活動を見てもらおうことを考えており、そのことを中学生に話すことでした。来ていた中学生は3人、話した結果は大変乗り気で、次までに親の承諾をもらって来ることになりました。この件をきっかけとして中学生といろいろな話ができただけで、今回すたんどばいみーにとってはとても大きな収穫だったようです。学校のこと、家庭のこと、一人は秋以降学校に通えていない状態だったのですが、その子の友達としてどう感じているかということ。これらの話は、震災と直接関係する内容ではなかったのですが、震災前からそれぞれの子どもが持っていた問題に関係していました。震災以降、学校や地域がひとまず落ち着きを見せる中で見えてきた「日常」の問題と言えるかもしれません。3月のホームステイは、もっとじっくりと中学生と話をする時間にしよう、すたんどばいみーのスタッフはそう考えたようです。日程の問題もあり、このホームステイ企画はまだ詳細は未定の様ですが、遠く離れて「日常」の問題を扱うことの難しさはありながらも、中学生にとって意味あるものにしようと考えているようです。

子どもたちの様子、仮設住宅の雰囲気は、不思議と「落ち着き」を感じさせるもので、仮設住宅での暮らしも「日常」になったことを示していました。それは、モビリアの仮設住宅で暮らす人々の言葉からも感じられました。避難所の時から、ずっと遊びに参加している保育園の女の子は、避難所で生活していた時と比べると、ずいぶんと発話が多く元気になっていました。そのことをお母さんに伝えると、「周りは地域の知っている人ばかりだったのに、やっぱり避難所の生活とか、そこから仮設に移るとか、引っ越し引っ越しで落ち着かなかったのだと思います。やっと落ち着いたのでしょう、以前のように話すようになりました。」と語ってくれました。すたんどばいみーが来ると、毎回自分の仮設住宅に誘ってくれるあるおばあさんは、避難生活を振り返っていろいろな話をしてくれたのですが、そのことが逆に今の生活の中で過去を振り返る余裕ができたことが感じられました。日曜日の朝、子どもたちとの遊びを終えた後、あるお宅が、今いる仮設住宅から、近くのより広い仮設住宅へ引っ越しをするため、そのお手伝いをしたのですが、お子さん2人とペットのいるそのお宅のこまごまとした生活家財の様子が、そこでの家族の日常生活を想像させました。

しかしこの「落ち着き」は、あくまで「仮設」での暮らしに過ぎないという事実があ

ります。仮設の今の「日常」から、まだまだ先になる「次」の暮らしを想像することは、きっと不安と隣り合わせのことに違いありません。「やっと落ち着いたから、ここから今後どうするという事は考えられない。このままこの仮設を売ってくれるなら、家のあった場所にそのまま移築したい」。仮設の自宅に誘ってくれたおばあさんの言葉です。

集会所では、地域の人たちとこの新しくできた集会所をどのように使っていくことがよいか話し合う会が行われていました。この不安と隣り合わせの「日常」を、地域で支えあいながら乗り越えていくための仕組みを作ろうとしているのだと思いました。遠く離れた神奈川県から子どもたちにできること、すたんどばいみーだけではなく、Ed.ベンチャーとしても考え続けなければならないと思いました。

【第4回報告会開催】

1月21日(土)18時より東日本大震災支援の2011年事業を総括するための報告会が開催され22人が集まりました。各地域の事業報告では、各支援を通して「何」にこだわってきた活動であったのかが報告されました。

■ニーズを探る■陸前高田支援の核

陸前高田の報告は、4月3日の最初の訪問の際にカメラにおさめられた光景がスライドに映し出されました。そこから始まった子どもや学校にこだわった支援活動は「何をすることが支援になるのか」を問い続ける過程(ニーズを探る)であったことが報告されました。避難所にあふれる支援物資、「必要なければ捨てて下さい」というメッセージの支援物資などを目の当たりにし、「支援」という名の権力性に戸惑いつつも、被災した学校に残された教師や、行政機関も壊滅した学校に残されたものだけでは何ともならない状況、加えて、都市ではなく日本社会の第一次産業の中心でありつつも、少子高齢化を抱え過疎化が進む地方でおきた災害などなど、今までの生活の前提となってきたことの多くを問い直すように、そこに広がる瓦礫が訴えているように見えたのです。こうして積み重ねられてきた活動は、地元を結集するための教育支援チーム「まつ」の結成へとつながってきたことが報告され、今後Ed.ベンチャーは「まつ」の後方支援を行っていくこととなることが報告されました。

■私たちは何ができたか…■石巻万石浦子ども支援の核

万石浦支援の報告は、「私たちはこんなことをやりました」というNPO報告会にありがちな成果をアピールするものとは一線を画し、成果にあえて触れずに「子どもの変化を確認する」という報告が行われました。私たちに向かう子どもたちの行動を、単なる人間関係の問題として捉えるのではなく、震災とその後の復旧に伴う大人の事情が、子どもたちの生活にどのような影響を及ぼしているかが検討されて、支援が継続されてき

陸前高田市 学校支援



たということが報告されました。参加した大学生からも「行けば殴られたたかかれているだけの支援が続く中で、ある時、到着が遅れたら『遅〜い!』と叫んで、動いている車に飛び乗ろうとする子どもたちをみて、これは続けなきゃいけないと思った」という話も出ました。万石浦の子どもたちは、けっこうハチャメチャで、様々な問題や課題を抱えている子どもも多いのですが、よい子やいい子ばかりが大事にされるのではなく、そんなやっかいな子どもたちにつきあう大人たちがいてもいいし、社会にはそんな余裕があってもいいのではないか、そんなことを考えさせられた報告でした。

スタッフ達は考えた

- ・このままでは子どもに引きずられるだけ
- ・子どもたちが集団として変わることがない

大きな枠、大きな目標を作ろう
 そうだ! 万石浦を離れて修学旅行に行こう!
 その準備の活動に子どもたちを巻き込んでいこう!

いやいや→しぶしぶ→いきたくない→ホントは楽しみ
 きまりも決めた・しおりも作った・親にも話した...

■原発問題に向き合う…■福島富岡町の学校支援

富岡町支援の核「原発問題に向き合う」

- ・ 支援物資を届けながら…
 - ・ 校舎は不十分でも生徒がいて先生がいる場所が子どもの一つの居場所になっている。
 - ・ 再開前避難先で不登校になった子どもが再開後の学校に通い始める。
- ・ 「町」「地域」の喪失がもたらしたもの
 - 「地域」が失われた時に子どもたちの居場所も失われる
- ・ 「復旧」の途にすらついていない原発立地地域は、今後の見通しも全く立っていない
 - 学校再開は、いずれは町に戻るができるという願い

富岡町の学校支援は、9月からの学校再開を決めた富岡町からの要請により8月から始まりました。原発誘致を行ってきた行政に対する支援を行うかどうかは、Ed.ベンチャー内部でも議論になりましたが、この原発事故が起きるまで、本当のところはきちんと知ろうとしたり考えようとしてこなかった私たちの側にも問題があったという理解により、「原発問題に向き合う」意志として、支援をすることを決めました。

支援物資の運搬を行った際には、学校関係者の方からいろいろお話をお聞きし、「まだ、先のことは何もわからない」という中で、教育という営みをどう意味づけていくか、その苦悩を感じる訪問になっていることが感じられた報告でした。

■会計報告■ (会計報告書別紙)

2011年4月2日から始まった東日本大震災支援は、添付の資料にありますように139の個人と団体から約400万円の寄付をいただき、震災支援助成(日本財団100万円・万石浦子ども支援限定フィランソロピー寄付300万円)を加えて、本隊の支援活動を行ってきました。特に、夏休みまでは毎週末東北に通い、支援物資を提供してきて260万の費用を要しました。また、理科室の備品・消耗品については、JPFより340万円の助成をいただきましたが、多くの方から理科備品の寄付により200万円で収まり、残金を返金することになっております。

夏休み以後は、陸前高田の学校支援については、福祉医療機構より400万円の助成金をいただき、学校支援物資の提供、子どもの遊びと学びの支援、学習交流会などを開催してきております。また、教育支援チーム「まつ」の立ち上げ、事務局長の臼井美穂さんのアルバイト雇用もこちらの資金で行っておりますが、3月までに使い切る予定です。一方、石巻万石浦子ども支援については、万石浦支援の指定寄付が多くあったために、それを資金として活動を行ってきております。現在の残額と震災支援の残額をあわせた152万を使って、万石浦の子どもたちの合宿(北海道)を行い、支援のまとめをする予定です。

■連携団体からの報告■

今回の報告会では、Ed.ベンチャーの連携団体からの報告ということで、①12月から再開されたすたんどばいみーの活動の報告、②前回の支援通信でご紹介した中学生として初参加した引地台中学校の藤原弘輝くんの報告、③教育支援チーム「まつ」の臼井美穂さんの報告が行われました。3つの発表で語られた内容は、Ed.ベンチャーという小さな団体の小さな支援活動が、時間をかけてこだわり積み重ねてきたことが、このような形となってあらわれてきていること、そして、臼井美穂さんからの「津波は、たくさん物をうばいましたが、こんなにも人をつなげ、新しいつながりができたことは、悪いことばかりではないと思いました」という言葉に、少しの安堵を覚えました。藤原君弘輝さんと臼井美穂さんの報告は、今回の通信の号外に掲載してあります。

【陸前高田】教育支援チーム「まつ」会員募集!!

陸前高田市での被災学校と子ども支援を継続的に行うために教育支援チーム「まつ」が立ち上がりました。地元にもともとある「子どもと未来を思う力」を再結集して、復旧と復興にかかる長い時間に向き合い続ける、息の長い活動を展開することを目的としています。会員としてご登録いただき、末永い支援にご協力ください。
 (入会申込書別紙)

Ed.ベンチャー会員登録のお願い!!

東日本大震災支援は、Ed.ベンチャーの会員のみならず、多くの方からご賛同いただき、事業を展開してきました。2012年も規模を縮小したり、後方支援という形に変えたりしながらも、支援活動を継続していく予定です。今回の事業を通しまして、Ed.ベンチャーをお知りになったみなさまには、是非会員登録をお願いいたします。
 (設立趣旨書・入会申込書別紙)

【支援隊活動記録 1月14日～1月22日】

■陸前高田学校支援

○1月14日～15日(第31回)すたんどばいみーのモビリア子ども支援
 □支援隊メンバー: 家上幸子 (Ed.ベンチャー事務局長)、チャンソワソナリット・チューブサラーン・宮脇英理・劉麗鳳 (すたんどばいみー)

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。
横浜銀行 中央林間支店 普通6018180
Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (エドベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間 3-16-12-107
 Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

